汪梧鳳『詩学女為』と戴震の詩経学との関連について

尾崎順一郎

はじめに

汪梧鳳（雍正三年-乾隆三十六年［一七二五―一七七二］）[1]は字を在湘といい、松渓と号した。安徽歙県西渓の人である。清代学術思想史上においては、戴震や程瑶田・金榜らとともに江永に従学した人物の一人として知られる。汪氏は徽州商人として財を成し、汪梧鳳の父である汪泰安が不疏園を造営し、江永や戴震らはここで汪氏の支援を受けながら学術と交流を深めていった。その意味では、汪梧鳳はいわゆる「皖派」の学の成立を支えた人物とも言える。もっとも、汪梧鳳の知名度は江永や戴震らに及ばないため、従来の研究ではほとんど取り上げられることがなかった。そこで、ここでは彼の伝記資料や著作などに関する基本的な情報を紹介した上で、本稿における関心の所在を示すことにしたい。

まず、汪梧鳳の伝記資料としては、鄭虎文の「行状」と汪中の「墓誌銘」があるのだが、それぞれ幾つかのテキストが存在し、諸書に収録される際に記述内容の修訂が行われていることから、閲覧に際しては注意を要する。[2]次に、彼の著作としては、『松渓文集』一巻（清刊本、清同治十二年刊本）[3]と『詩学女為』二十六巻[4]が伝わっている。『松渓文集』は汪梧鳳の死後に次子の汪灼が編纂したものである。汪中の「墓誌銘」では「著す所の文二百余篇」というが、二十三篇を収録するに止まっている。一方、『詩学女為』は詩経の注釈書であり、書名は『論語』陽貨で孔子が孔鯉（伯魚）に対して「女は周南・召南を為むるか」と語った故事に由来する。[5]本書もまた汪梧鳳の死後に汪灼が編纂したものである。[6]この他、目録上では戴震の『屈原賦注』に対する『音義』三巻の撰者として著録される場合もあるが、これは戴震が『屈原賦注』を不疏園で出版するのを支援するために汪梧鳳の名を冠しているだけであり、実際の撰者は戴震である。[7]

このように見てくると、汪梧鳳自身が編纂した書籍は遺っていないわけだが、これらの中では『詩学女為』が彼の学問傾向を窺うことのできる数少ない資料と見なすことができる。そして、この『詩学女為』は何より戴震の初期の経学関連の著作であり、これまで不疏園との接点が指摘されて来た『毛詩補伝』や『経考』『経考附録』との関連が予想されることから、戴震の詩経学や不疏園内における学問との関連を考える上でも注目に値する。そこで、本稿ではこうした点を視野に入れ、汪梧鳳『詩学女為』の文献的性格および詩経解釈の方法について検討することにしたい。

一　汪梧鳳『詩学女為』の文献的性格

『詩学女為』は巻首部分に鄭虎文「明経松渓先生汪君行状」、汪梧鳳

「序」、同「総論」全九条を附している。そして、本文部分は国風十五巻、小雅五巻、大雅三巻、頌三巻から成り、『十三経注疏』本の詩経や朱熹の『詩集伝』では小雅に収録される「南陔」「白華」「華黍」「由庚」「崇丘」「由儀」といった、詩題を遺して詩句を失った逸詩は取り上げていない。また、詩篇の解釈に際しては、基本的に詩篇の趣旨に関する考察と語句の意味に関する考証の二部構成を取っているが、概ね箚記的な叙述となっているため、詩篇の解釈や詩経学の諸問題に対する汪梧鳳の見解を隅々まで読み取ることはできないが、それでもある程度の方向性を見出すことは可能である。以下、戴震の詩経学や不疏園内における学問との関連を視野に入れて、本書の文献的性格を考えてみたい。

（1）戴震の『経考』『経考附録』『戴氏経考』について

戴震の詩経学に関する著作としては、『杲溪詩経補注』二巻、『毛鄭詩考正』四巻があり、この他に文集（微波榭叢書本『東原文集』十巻、経韵楼本『戴東原集』十二巻）や『経考』五巻・『経考附録』七巻の中に関連する文章を見出すことができる。また、王千仞『詩経比義述』に寄せた序文の中に、「かつて乾隆十七、八年［一七五二、一七五三］に、わたくし戴震は『詩補伝』を作ったものの、完成しませんでした（昔壬申・癸酉歳、震為詩補伝未成）」とあることから、[8]戴震早年の著作として『毛詩補伝』（文集には「毛詩補伝序」を収録することから、以下においては『詩補伝』ではなく『毛詩補伝』の呼称を用いる。）が存在したことが知られていたが、一九九〇年代になって二種類の戴震の著作集が標点整理されると、この『毛詩補伝』が現存していることが知れ渡った。すなわち、戴震研究会等編『戴震全集』（全六冊、清華大学出版社、一九九一年―一九九九年）第四冊に『戴氏詩経考』として収録され、また張岱年主編『戴震全書』（全七冊、黄山書社、一九九四年―一九九七年。二〇一〇年には修訂本が出版されている）第一冊に『毛詩補伝』として収録されるのがそれである。これらが底本としているのは、中国国家図書館に『戴氏経考』として収録される全四冊の抄本資料（索書号：一〇〇〇七）であり、この『戴氏経考』の発見と整理により、戴震の詩経学研究は新たな局面を迎えることとなった。

ところで、汪梧鳳の『詩学女為』と戴震の詩経学との関連を考える際には、『経考』『経考附録』そして『戴氏経考』の文献的性格を理解しておく必要がある。なぜなら、これらの文献は不疏園と深い関係があるからである。『経考』『経考附録』は『戴東原先生全集』（『安徽叢書』第六期、安徽叢書編審会、一九三六年）が出版されたことで閲覧が容易になり、[9]これまでの研究においても戴震の学術形成期に関する著述として注目されて来た。ここではそれぞれの文献としての性格に価値を見出すため、その基本的な情報を確認しておく。

まず、『戴東原先生全集』に収録される『経考』は「南陵徐氏復校本」を底本としている。これは徐乃昌が民国初年に王懿栄の天壌閣抄本を底本として『鄦斎叢書』に収録して出版したものである。『経考』には幾つかの抄本が存在しており、『中国古籍総目』経部第二冊（中華書局・上海古籍出版社、二〇〇九年、九六五頁）には、四巻本：李文藻抄本（北京大学図書館蔵）、五巻本：李文藻家抄本（中国国家図書館蔵）、[10]清末抄本（北京大学図書館蔵）、六巻本：柯劭忞校・譚献校、光緒九年抄本（上海図書館蔵）[11]を著録するが、戴震や不疏園との直接的な関係は窺えないし、天壌閣抄本がどれに該当するのかも分からない。

次に、『戴東原先生全集』に収録される『経考附録』は許承堯が所蔵していた抄本二冊を底本としている。『中国古籍総目』経部第二冊（九六六頁）に著録される屯溪市図書館蔵本がこれに該当するのであろ

う。『戴東原先生全集』本の巻末には許承堯の跋文と羅光「経考附録校記」・識語が附されており、許承堯によると『経考附録』は湖田草堂（主人は呉得英、生卒時期不詳、字は筱晴といい、歙県の人）旧蔵の乾隆写本二冊であり、もとは不疏園に由来するという。また、彼は『経考附録』の「書趺」には「三」「四」の二字が記してあることから、失われた「一」「二」の二冊は『経考』がこれに当たると推測する。[12] 前述の『経考』抄本の内、これに対応するものが存在するのかも知れないが、詳細は不明である。

最後に、『戴氏経考』について見ていこう。前述の通り、本書は『戴震全集』と『戴震全書』に収録されたことで容易に閲覧することができるようになったが、それぞれが書名や文字・体裁などを改めたりしていることから、抄本の原貌を窺い知るには物足りない。管見の限りではあるが、現時点で『戴氏経考』の影印出版や画像公開はなされていないため、中国国家図書館で現物もしくはマイクロフィルムを見る以外に、その原貌を確認する手立てはない。

ところで、『戴震全書』の「説明」が指摘する通り、『戴氏経考』には「汪灼校書蔵書之印」「葉氏徳輝鑑蔵」などの印がある。葉徳輝の旧蔵に関しては『郎園読書志』巻一にも「戴震詩考四冊」を著録する。[13] そして、もう一方の「汪灼」とは汪梧鳳の次子の汪灼に他ならないため、この抄本『戴氏経考』が不疏園で伝承された文献であることは確実である。案の定、汪梧鳳の『詩学女為』には「戴氏震曰」などとして戴震の所説が少なからず引用されており、それらは『戴氏経考』の記述とも一致する。かつて、楊応芹氏は「関於《戴氏経考》即《毛詩補伝》的考証」（『文献』、書目文研出版社、一九九五年第一期）の中で、胡承珙『毛詩後箋』や王先謙『詩三家義集疏』に『戴氏経考』の鄭風「丰」からの引用文があることを指摘された。だが、詩経全体に渡って注釈がなされている『戴氏経考』と一致する文章が、それぞれ僅か一条しかない上に同じ箇所を引用するというのは余りにも不自然である。実は彼らが引用する文章は『詩学女為』の中にも見えており、『戴氏経考』と『詩学女為』の文章を比較してみると、『詩学女為』は途中で二度の中略を行っており、[14] 『毛詩後箋』も全く同じ箇所で中略を行っている。[15] 胡承珙は『毛詩後箋』の中で『詩学女為』も引用していることからすると、彼は『毛詩補伝』の文章を『詩学女為』から孫引きしたと考えられる。また、王先謙は戴震の説を引用した直後に胡承珙の説を引用しているから、[16] 曾孫引きを行ったのだろう。このことは、『毛詩補伝』ないし『戴氏経考』の閲覧が困難であり、『詩学女為』は伝世資料には見えない戴震の見解を保存する文献としての価値があったことを物語っている。

（2）汪梧鳳『詩学女為』における戴震説の利用について

程嫩生「《戴氏経考》為戴震《毛詩補伝》的補充考証」（『南昌大学学報（人文社会科学版）』、二〇〇八年第三期）は、汪梧鳳が『詩学女為』の中で『戴氏経考』に見える文章を頻繁に引用していることを指摘している。程氏の指摘はその通りであるのだが、汪梧鳳の『詩学女為』と戴震の詩経学との関係を考える際には、『戴氏経考』のみならず『経考』『経考附録』との関係も考慮しなければならない。とりわけ、汪梧鳳の詩経学観が示された「総論」部分との関係に注目する必要がある。

手始めに「総論」第一条を取り上げる。なお、この文章の中盤以降は朱彝尊『経義考』の文章を引用するが、[17] 長文のため省略した。

司馬遷曰、「古詩三千余篇、孔子刪之、存者三百一十一篇」、是則秦火之後、独詩為完書、而凡経伝所引逸詩、有其辞者、若貍首・

驪駒・祈招・轡之柔矣。無其辞者、若采薺・河水・新宮・茅鴟・鳩飛等篇、皆孔子所刪二千七百余篇之文乎。論語云、「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」、「誦詩三百、授之以政、不達。使於四方、不能専対。雖多亦奚以為」、皆挙全詩而言、未必定為刪後之辞。季札聘魯、請観周楽、於時夫子未刪詩也。自雅・頌之外、其十五国風尽歌之。今三百篇与魯楽官所歌、無所損益、則刪詩之説、不足信矣。朱氏経義考曰、「……」朱氏指駁刪詩、其説百世不易、故備録之。[18]

ここで注目したいのは、この叙述の大半が引用文によって構成されているという点である。ただし冒頭の司馬遷の言葉は『史記』にそのままの文章を見出すことができず、以下に見る蘇天爵『滋渓文稿』に引く「太史公」の語と多く重複する。ゴチック・網掛け部分がそれである。

太史公曰、「古詩三千余篇、孔子刪之、存者三百一十一篇」、是則秦火之余、詩亦為完書矣。而凡経伝所引逸詩、是皆孔子所刪二千七百余篇之文乎。今考之孔子之言、曰、「吾自衛反魯、然後楽正、雅・頌各得其所。」又曰、「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」、未嘗言刪詩也。……当季札之聘魯、請観周楽、於時夫子未刪詩也。自雅・頌之外、其十五国風尽歌之。考之今三百篇及魯人所存、無加損也。其謂夫子刪詩者、果可信乎。[19]

汪梧鳳と蘇天爵の文章を比べると、司馬遷の言葉だけでなく、『論語』を引用して孔子刪詩説に疑義を示す論理展開と使用語句もほとんど重複している。一方で汪梧鳳は「逸詩」部分を具体的に挙げ、『論語』からの引用を変更しているがその「逸詩」部分については、王応麟『困学紀聞』巻三・「詩」に、「逸詩篇名。若貍首【射義】・驪駒【大戴礼・漢書注】・祈招【左伝】・轡之柔矣【左伝・周書】、皆有其辞。唯采薺【周礼】・河水・新宮・茅鴟【左伝】・鳩飛【国語】、無辞。……」[20]と見えることからすると、汪梧鳳は蘇天爵と王応麟の文章を組み合わせて文章を作ったことが窺える。ただ、実のところ、蘇天爵と王応麟の文章は、朱彝尊『経義考』巻九十八にも見えている。[21]だとすると、汪梧鳳はこの「総論」第一条を記す際に、『経義考』を用いていたと言えそうである。

つづいて、「総論」第五条を見てみよう。

或曰、「呉・楚之無詩、非以其僭王而刪之与。」曰、「非也。太師之本無也。」顧炎武曰、「楚之先熊繹辟在荊山、篳路藍縷、以処草莽、「惟是桃弧棘矢、以共禦王事」、而周無分器。岐陽之盟、「楚為荊蛮、置茅蕝、設望表、与鮮牟守燎而不与盟」。是亦無詩之可采矣。況於呉自寿夢以前、未通中国者乎。滕・薛之無詩、微也。虢・鄶皆為鄭滅、而虢独無詩。陳・蔡皆列春秋之会盟、而蔡独無詩、有司失其伝爾。」[22]

この文章は冒頭で「或曰」と「曰」の問答を示した上で、顧炎武の見解を紹介している。この顧炎武の発言については、『日知録』に次のように見えている。

呉・楚之無詩、以其僭王而刪之与。非也、太師之本無也。「楚之先熊繹辟在荊山、篳路藍縷、以処草莽」、「惟是桃弧棘矢、以共御王事」、而周無分器。【左氏昭公十二年伝。】岐陽之盟、「楚為荊蛮、置茅蕝、設望表、与鮮牟守燎而不与盟」。【晋語。】是亦無詩之可采矣。況於呉自寿夢以前、未通中国者乎。滕・薛之無詩、微也。若乃虢・鄶皆為鄭滅、而虢独無詩。陳・蔡皆列春秋之会盟、而蔡独無詩、有司失其伝爾。[23]

汪梧鳳は「或曰」と「曰」の問答を示した上で顧炎武の見解を紹介していたが、これを見ると問答そのものが『日知録』の文章を改変し

て作られたものであることが窺える。

顧炎武に関する言及は、「総論」第六条にも見ることができる。

周礼鑰章、逆暑迎寒、則歙豳詩。祈年於田祖、則歙豳雅。祭蜡則歙豳頌。鄭康成三分七月之章以当之、固属割裂無拠。雪山王氏曰、「此一詩而三用也。」鑰章之豳詩、以鼓・鍾・琴・瑟四器之声合鑰也。笙師、歙竽・笙・塤・鑰・簫・篪・篴・管、春牘・応・雅、凡十二器、以雅器之声合龠也。視瞭播鼓、擊頌磬・笙磬、凡四器、以頌器之声合龠也。凡為楽器、以十有二律為之数度、以十有二声為之斉量、凡和楽亦如之。此用七月一詩、特其以器和声有不同耳。顧氏炎武従之。愚謂：[24]

ここでは「顧氏炎武 之に従ふ」としか述べていないが、これに関連する顧炎武の見解は『日知録』の中に次のような記述を探し出すことができる。

自周南至豳、統謂之国風。此先儒之誤、程泰之弁之詳矣。豳詩不属於国風、周世之国無豳。此非太師所采、周公追王業之始、作為七月之詩、兼雅・頌之声、而用之祈報之事。周礼鑰章、「逆暑迎寒、則歙豳詩。祈年於田祖、則歙豳雅。祭蜡則献豳頌。雪山王氏曰、此一詩而三用也。【謂 鑰章之豳詩、以鼓・鍾・琴・瑟四器之声合籥也。笙師歙竽・笙・塤・籥・簫・篪・邃・管、春牘・応・雅、凡十二器、以雅器之声合籥也。】眡瞭播鼗、擊頌磬・笙磬、凡四器、以頌器之声合籥也。凡為楽器、以十有二律為之数度、以十有二声為之斉量、凡和楽亦如之。此用七月一詩、特其以器和声有不同爾。】鴟鴞以下、或周公之作、或為周公而作、則皆附於豳焉。雖不以合楽、然与二南同為有周盛時之詩、非東周以後列国之風也、故他無可附。[25]

これを見れば、汪梧鳳が顧炎武の文章を利用していることは明らかである。

ここまで、「総論」中の三条を取り上げ、それぞれが朱彝尊『経義考』と顧炎武『日知録』を踏襲して作文していることを見て来た。だが、これら三条については、汪梧鳳が朱彝尊『経義考』や顧炎武『日知録』を手がかりに作文したと結論づけるわけにはいかない。というのも、第一条に見える蘇天爵・王応麟そして朱彝尊の文章は、すべて戴震の『経考附録』巻三・「刪詩」に、第五条に見える顧炎武の文章は同巻三・「詩之編次」に、第六条の顧炎武の文章も同巻三・「豳雅豳頌」に見出すことができる。つまり、汪梧鳳は戴震の『経考附録』を見ることができれば、これら三条を作り出すことができたのである。

つづいて、「総論」第八条を見てみよう。

戴侗曰、「経伝『行』、皆戸郎切、未嘗有協『生』韻者。『慶』、皆去羊切、未嘗有協『敬』韻者。如『野』之上与切、『下』之後五切、皆古正音、非叶音也。」江脊斎先生曰、「唐人釈経、不具古音。且云、古人韻緩、不煩改字。宋呉棫才老始作韻補、蒐群書之韻、異乎今音者、別之為古音。明楊慎用修又増益之為転注古音。言韻学者、謂二家為古韻権輿、而韻補尤毛詩功臣。余謂凡著述有三難。淹博難、識断難、精審難。二家淹博有之、識断・精審、則未也。三百篇後、古音亦漸尨矣。屈宋辞賦、往往有齟齬之韻。漢雖近古時有古音、而踳駮舛謬者、亦不少。魏晋而後、古韻益微降、及唐宋口習今韻、而又間為古韻。此何足為典拠。而二家惟事徵引、殊少決択、古韻亦茫無界畔、似諸韻皆可混通、此識断之難言也。古有韻之文、亦未易読、稍不精細、或韻在上而求諸下、韻在下而求諸上、韻在彼而誤叶此。或本分而合之、本合而分之、或間句散文、而以為韻、或是韻而反不韻、甚則読破句、拠誤本、雑郷音。其誤不在古人而在我。二家往往不免、此精審之難言也。」

愚謂……[26]

ここには戴侗『六書故』と江永『古韻標準』例言の文章が引用されているが、この二つの文章は『経考』巻三「古音叶音」にも見えている。戴震は『経考』の中で江永の説を引用する際に「江昏斎先生」と表記し、江永の文章を引用する際に二度の中略を行っているが、汪梧鳳はいずれも同じ扱いをしている。してみれば、汪梧鳳は『古韻標準』からではなく、『経考』から引用したと考えるのが自然である。戴震は「与是仲明論学書」の中で、「僕が作った『経考』は、これまで人に示したことはない。それはこれを見て驚愕し困惑する者が多く現れることを恐れたからである（僕所為経考、未嘗敢以聞於人。恐聞之而驚顧狂惑者衆）」[27]と述べているが、不疏園には『経考附録』だけでなく『経考』もあり、汪梧鳳はそれらを利用することができたのだろう。また、戴震は王千仞『詩経比義述』に寄せた序文の中で「昔壬申・癸酉歳、震為詩補伝未成」と述べていたが、この直後には「これとは別に書内の弁証を摘録して一帙を作っていたが、以前その説を踏襲して自身の書を作って刊行する者がいた（別録書内弁証成一帙、曾見有襲其説、以自為書刊者）」[28]と続けている。この序文は文末に「乾隆丙申（乾隆四十一年［一七七六］）三月、休寧戴震謹序」とあるので、汪梧鳳の逝去後に記したことになる。『詩学女為』の出版時期は不明であるが、戴震の存命中に『毛詩補伝』の説を取り込んで出版することができた人物は限られたはずで、戴震は汪灼による『詩学女為』の出版を念頭に、上記の発言をしたのではないだろうか。「弁証」は今の『戴氏経考』中には見えないが、もともと書中にあったものが抜き出されて、『経考』『経考附録』という「一帙」としてまとめ直されたのではないかと思われる。

ところで、最近、水上雅晴氏は「戴震の初期思想と宋学との距離――《経考》と《経考附録》に着目した考察」（『中央大学文学部紀要（哲学）』第六十七号、二〇二五年）を著して、『経考』『経考附録』に収録される先儒の説の多くが朱彝尊『経義考』から引用されており、それは不疏園の蔵書を利用したのではないかという指摘をされたが、『詩学女為』「総論」の出典調査からは逆に汪梧鳳による『経考』『経考附録』の活用が確認できた。また、水上氏は『経義考』以外に『五礼通考』が活用されていることも指摘されている。この点については逐一の挙例は省くが、『詩学女為』本文の十五国風冒頭に示された地理考証に関する文章の出典調査を行うと、『戴氏経考』冒頭の「経考目録」（『戴震全集』は「詩経考目録」、『戴震全書』は「毛詩目録」に改める）の他、『読史方輿紀要』、『大清一統志』そして『五礼通考』等々が活用されていることを確認でき、『五礼通考』も不疏園で共用されていたことが窺える。

また、こうした不疏園内における資料の共用は戴震による『毛詩補伝』編纂の背景を考える手がかりともなり得る。かつて、種村和史氏は「振り捨てきれない遺産――戴震『毛鄭詩考正』における宋代詩経学の引用の意義」（『慶応義塾大学日吉紀要（中国研究）』第一〇号、慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会、二〇一七年）の中で、『毛詩補伝』（『戴氏経考』）『毛鄭詩考正』『杲渓詩経補注』における宋代以降の学者の説の引用状況を一覧表として整理された。今、その成果を借用して『戴氏経考』の引用元について調査すると、戴震が引く先儒の説の大部分は、朱熹の『詩集伝』の他に先儒の説を多く引く『欽定詩経伝説彙纂』の中に見ることができる。そして、その『欽定詩経伝説彙纂』は『詩学女為』の中でも活用されていることからすると、戴震は不疏園内で該書を利用して『毛詩補伝』の編纂に取り組んでいたと想像できる。ただ、そうであるならば、戴震は『毛詩補伝』編纂時に先儒の詩

経学の成果を体系的にではなく、断片的にしか受容していなかった可能性が生じるし、『毛鄭詩考正』『杲溪詩経補注』において先儒の説の引用が激減するのは、戴震の意図に基づくのか、資料環境が然らしめたのか、という疑問も生じる。このことは戴震の詩経学研究における新たな糸口になるだろう。

二　詩篇解釈における「思ひ邪無し」説の意義

戴震が『毛詩補伝』の編纂に際して孔子の「思ひ邪無し」（『論語』為政）という発言に着目し、詩経全体を貫く解釈理念として位置づけていたことは、これまでの研究でもしばしば指摘されており、最近では種村和史氏が「「思ひ邪無し」の詩学――南宋・楊簡との比較から見た戴震の詩経解釈の特徴と解釈学史的位置付け」（『日本儒教学会報』第九号、日本儒教学会、二〇二五年）と題した研究を発表されている。種村氏はその結論部分において、戴震の「思ひ邪無し」という解釈理念が「彼以後の清朝考証学の詩経学に明示的には受け継がれなかったように見える」と指摘されるのだが、汪梧鳳は『詩学女為』の中で戴震と同様に「思ひ邪無し」という解釈理念に着目している。もっとも、汪梧鳳の『詩学女為』は当時の学術界に対して大きな影響力を有していたわけではないから、本書の存在によって種村氏の見通しが直ちに改められるわけではないのだが、清代詩経学における「思ひ邪無し」という解釈理念の受容を考える際の材料の一つにはなるだろう。種村氏は戴震と楊簡の比較を行った際に、彼らがともに「思ひ邪無し」という理念を奉じておきながら対照的な解釈を生み出していることを指摘されたが、それでは戴震と汪梧鳳の場合はどうであろうか。本節では戴震との比較も視野に入れつつ、汪梧鳳の「思ひ邪無し」という解釈理念を検討していくことにしたい。

まずは戴震が「思ひ邪無し」説を表明した、『戴氏経考』の序文を見ておこう。

「詩三百、一言以て之を蔽はば、思ひ邪無しと曰ふ」とは、孔子が詩経を評した言葉である。ところが、国風の中には貞正な詩と淫奔な詩があることから、ある論者は「思ひ邪無し」という語を詩を読む者の心のあり方と見なして、詩経全体の中に邪な思いが詠まれた詩がないわけではないと主張しているが、これは孔子が詩経を評した際の意図とは異なる。（「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」、夫子之言詩也。而風有貞淫、説者遂以「思無邪」為読詩之事、謂詩不皆無邪思也、非夫子之言詩也。）[29]

戴震はこの中で孔子のいう「思ひ邪無し」という理念が詩経全体を貫く理念としてはたらいており、決して「説者」が言うように詩を読む者の心の状態を表すのではないと指摘している。この「説者」とは種村氏（二〇二五）が指摘されるように、朱熹のことが念頭にある。朱熹は「鄭衛の音」（『礼記』楽記）や「桑間濮上の音」（同上）を詩経に収録される詩篇に結びつけ、詩篇そのものに道徳性のほころびを見出そうとしていた。戴震自身も詩経の中に貞詩と淫詩あるいは美詩と刺詩が混在していると考えてはいたが、それらは時世への戒めとして詠まれたものであると理解しようとしたのである。[30]

一方、汪梧鳳は『詩学女為』の「総論」第三条で、次のような見解を示している。

そもそも、淫詩とはどれも淫者を非難する言葉であって、決して淫者自身が詠んだものではなく、淫者を非難する場合でも個々に懲戒を行おうとする意図があり、単にその事を詠んで辱しめるわけではない。もし、詩に詠んで辱しめるだけなら、一つの事を戒

めて百の事を勧めることになってしまい、そんなことで詩は貴いだろうか。そのため、私は序に従うこともあれば、朱子に従うこともあり、ひたすら「思ひ邪無し」という一語で概括して、私意は介入させたりはしない。私はこのように三百五篇全体を解説するのである。ひとまず四つの詩を挙げて他の詩の例とする。（凡淫詩皆刺淫者之詞、必非淫者自道、而刺淫者亦各有所以為懲戒之意、非徒咏其事以醜之也。若徒詩以醜之、諷一而勧百、其奚貴焉。故余或従序、或従朱、一以「思無邪」一語衷之、而私意不設。予之説三百五篇、皆如是。聊挙四詩以例其余。）[31]

汪梧鳳はここで淫詩は淫者自身が詠んだものであることを否定するが、これは朱熹説への批判に他ならない。汪梧鳳の『詩学女為』は朱熹の『詩集伝』を祖述することを目指しているが、淫詩や刺詩に対する理解は受け入れられなかったようである。汪梧鳳としては、淫詩や刺詩は淫者を非難する詩篇のことであり、そこには「懲戒の意」が込められていると理解し、戴震と同じように詩篇そのものの道徳的完全性、無謬性を信じていたのである。

それでは、汪梧鳳は朱熹が淫詩や刺詩と認めたものをどのように理解しようとしたのか。その例として四首の詩を挙げ、「たとえば、東門之墠は賢者を思慕する詩篇と考える。溱洧は鄭国の風俗には男女のけじめがないことを刺る詩篇である。静女は淫者が彤管を最後まで保持できなかったことを刺る詩篇である。氓は淫者が男に棄てられたことを刺り、物事の起点を慎むことを戒めた詩篇である（如東門之墠、愚謂懐賢也。溱洧、刺鄭俗之男女無別也。静女、刺淫者彤管之守不終也。氓、刺淫者之見棄、戒慎始也）」と述べる。そこで、以下においては、これら四首に対する汪梧鳳の解釈を見ていくことにしたい。その際には詩序、朱熹、戴震の見解も適宜参照することになるが、それぞれの立場に即して詩篇の理解や日本語訳を挙げるのは余りにも煩雑であるため、目安として吹野安・石本道明共著『朱熹詩集伝全解釈』（明徳出版社、一九九六年）を参照して、詩篇の原文と書き下し文を挙げることとする。

まずは、鄭風「東門之墠」の解釈から見ていこう。

東門之墠、茹藘在阪。其室則邇、其人甚遠。

東門の墠、茹藘 阪に在り。其の室は則ち邇く、其の人は甚だ遠し。

東門之栗、有践家室。豈不爾思、子不我即。

東門の栗、践たる家室有り。豈に爾を思はざらんや。子 我に即かず。

この詩に対して、詩序は「東門之墠は、乱を刺るなり。男女に礼を待たずして相ひ奔る者有るなり」と言い、戴震もこれを敷衍して、礼を踏み越えた男女の交わりを刺る詩と解釈する。[32] 朱熹にしても、「其の与に淫する所の者の居を識すなり」と言い、男女の淫奔を詠む詩と解釈している。いずれも淫詩という認識を示すわけだが、汪梧鳳は全く異なる見解を示している。すなわち、五胡十六国時代の前涼の酒泉太守であった馬岌が宋纖との面会を果たせず、「其室則邇、其人甚遠」を踏まえた詩を石壁に刻んだ故事を踏まえて、「賢人を懐ふ」ことを詠んだ詩と解釈するのである。[33] このように後世の詩を根拠に「東門之墠」を解釈することの妥当性には疑問が残るのだが、この解釈は汪梧鳳の独創というわけではなく、『御纂詩義折中』の中にも見えている。[34] 汪梧鳳は「総論」第九条で『御纂詩義折中』を顕彰しており、[35] その権威をも拠りどころとして、「東門之墠」を刺詩から外すのである。

次に、鄭風「溱洧」の解釈を見てみよう。

溱与洧、方渙渙兮。士与女、方秉蕑兮。女曰観乎、士曰既且。且

往観乎。洧之外、洵訏且樂。維士与女、伊其相謔、贈之以勺藥。
溱と洧と、方に渙渙たり。士と女と、方に蕑を秉る。女曰はく「観んか」と、士曰はく「既にす」と。「且つ往きて観んか。洧の外、洵に訏にして且つ楽し」と。維れ士と女と、伊れ其れ相謔し、之に贈るに勺藥を以てす。
溱与洧、瀏其清矣。士与女、殷其盈矣。女曰観乎、士曰既且。且往観乎。洧之外、洵訏且楽。維士与女、伊其将謔、贈之以勺藥。
溱と洧と、瀏として其れ清し。士と女と、殷として其れ盈てり。女曰はく「観んか」と、士曰はく「既にす」と。「且つ往きて観んか、洧の外、洵に訏にして且つ楽し」と。維れ士と女と、伊れ其れ将に謔し、之に贈るに勺藥を以てす。

この詩に対して、詩序は「溱洧は、乱を刺るなり。兵革息まず、男女相ひ棄て、淫風大いに行はれ、之を能く救ふ莫し」と述べている。要するに、戦乱により社会が乱れ、男女の間でも淫奔の風潮が流行したと解釈する。これに対して、戴震は冒頭の「乱を刺るなり」には同意するものの、「兵革息まず」以降は疑念を持ち、男女間の淫奔の風潮は鄭の習俗が形成し、それを戒めるために作られた詩篇と考えた。[36] 種村氏（二〇二五年）が指摘される通り、戴震は詩序の第一句を子夏以来の師承にもとづく考え方、第二句以降は第一句に対する毛公の敷衍解釈と理解していた。「溱洧」解釈もこれに拠るのであろう。

一方、汪梧鳳はというと、戴震の説をほぼ忠実に引用していることから、鄭の習俗から生じた淫詩と見なすことには同意していたのであろうが、朱熹が「此の詩は淫奔者の自ら叙ぶるの詞なり」という見解を示したことは受け入れられなかったようである。汪梧鳳は詩の中に「女曰観乎、士曰既且」や「維士与女、伊其相謔」などの句が見えることから、「溱洧」は詩人が第三者の立場から男女のやり取りを見て詠んだ刺詩と解釈することで、朱熹の「淫奔者の自叙」という見解を斥けるのである。[37] もっとも、こうした主張は『欽定詩経伝説彙纂』に引く張彩の説に見出すことができ、[38] 汪梧鳳自身の独創とは言い難い。

つづいて、邶風「静女」の解釈を見ていく。

静女其姝、俟我於城隅。愛而不見、搔首踟躕。
静女其れ姝し、我を城隅に俟つ。愛すれども見ず、首を搔きて踟躕す。
静女其變、貽我彤管。彤管有煒、説懌女美。
静女其れ變たり、我に彤管を貽る。彤管 煒たる有り、女の美を説懌す。
自牧帰荑、洵美且異。匪女之為美、美人之貽。
牧より荑を帰る、洵に美にして且つ異なり。女の美たるに匪ず、美人の貽。

この詩に対して、詩序は「静女は、時を刺るなり。衛君は無道にして、夫人は無徳なり」と言い、朱熹は「此れ淫奔期会の詩なり」と言い、男女の逢引きが詠まれていると考える。戴震は「静女」を朱熹のように淫奔者とは見なさず、むしろ詩序の説を取り込みつつ、衛の人が宮中に貞淑で美しい媵がおらず、衛君の夫人を諫め導く秩序もないことに擬えた詩として、「賢媵を思ふ」ことを詠んでいると解釈する。[39]

これに対して、汪梧鳳は朱熹の淫奔説を採用する。汪梧鳳は欧陽脩が「彤管」を宮中の女史が用いる筆と解釈することに疑念を抱いたことに同意し、さらに『左伝』や杜預の説を結び付けて、道徳的規範を示す「女史」としての「静女」と解釈することを斥ける。その上で、首章で女が男に会おうとしなかったのに、二章では男に会いつつも、なお気を許しておらず、三章に至って男に靡くことになり、その貞淑

さを全うできなかったことを刺っていると理解した。[40] ここで注目すべきは、「詩の辞は具さに在り、善く読む者は皆な意領すべきなり」という解釈方法を提示している点である。汪梧鳳は「溱洧」解釈で「女曰観乎、士曰既且」「維士与女、伊其相謔」を根拠に詩の作者を男や女とは別の第三者とする見解を示していたように、ここでも詩篇の中の「愛而不見」「貽我彤管」「歸荑」や「静女」「美女」などに着目し、事態の推移を読み込んでいく。種村氏（二〇二五年）が指摘されたように、戴震は詩序や歴史的資料を駆使して、詩人の意図を読み解いていこうとする傾向があり、ここでも『左伝』を根拠に解釈を試みるが、汪梧鳳はむしろ詩篇の語句の使われ方を全体の文脈の中で検討して詩人の意図を読み解いていくことに意義を見出そうとするのである。

最後に、衛風「氓」の解釈を見る。ただし、この詩は長文のため原文の引用は一部に止めたい。

氓之蚩蚩、抱布貿糸。匪来貿糸、来即我謀。送子涉淇、至于頓丘。匪我愆期、子無良媒。将子無怒、秋以為期。

氓の蚩蚩たる、布を抱きて糸に貿ゆ。来りて糸に貿ゆるに匪ず、来りて我に即きて謀る。子を送りて淇を渉り、頓丘に至る。我 期を愆つに匪ず、子に良媒無し。将ふ 子 怒る無かれ、秋以て期と為さん。

……

桑之落矣、其黄而隕。自我徂爾、三歲食貧。淇水湯湯、漸車帷裳。女也不爽、士貳其行。士也罔極、二三其德。

桑の落つる、其れ黄にして隕つ。我 爾に徂きしより、三歲食貧し。淇水湯湯として、車の帷裳を漸す。女や爽はず、士は其の行を貳にす。士や極ること罔し、其の德を二三にす。

……

及爾偕老、老使我怨。淇則有岸、隰則有泮。総角之宴、言笑晏晏。信誓旦旦、不思其反。反是不思、亦已焉哉。

爾と偕に老いんとして、老ゆれば我をして怨ましむ。淇には則ち岸有り、隰には則ち泮有り。総角の宴に、言笑晏晏たり。信誓旦旦たり、其の反せんことを思はざりき。反せんことを思はざりき、亦た已んぬるかな。

この詩に対して、詩序は「氓は、時勢を刺る詩である。衛の宣公の時代には、礼義が消失し、淫らな風潮が大いに流行した。男女の間にけじめがなくなり、やがて男が誘惑すると女はそれに靡いたが、女は容姿が衰えると、やがて男に裏切られて棄てられた。女の中には夫を失ったことを悔やむ者がいたので、その成り行きを叙述して風刺しているのである。この詩篇は女が正しいあり方を省みたことを称えて、淫らな行いをしたことを刺っているのである。（氓、刺時也。宣公之時、礼義消亡、淫風大行。男女無別、遂相奔誘、華落色衰、復相棄背。或乃困而自悔喪其妃耦、故序其事以風焉。美反正、刺淫泆也）」と言う。これに対して、戴震は詩序をほぼ全文引用するが、末尾の「美反正、刺淫泆也」部分を引用せず、代わりに陳鵬飛の「詩人にはきっと意図するところがあって、一人の女性の成り行きを詳述して戒めにしようとしたに違いない」という発言を引く。詩序が「美反正、刺淫泆也」というのは、男に棄てられた女に「美」「刺」の両面を見出そうとするものであるが、戴震は女が男に棄てられるまでの一連の流れを詠むことで「刺」の面を強調するものとして理解しようとするのである。[41]

これに対して、汪梧鳳は「聖人がこれを記載するのは、女のためだけに戒めるのではない」と述べ、男に捨てられた女のこととして囲い込むのではなく、万人向けの戒めの詩として理解する。このことは朱熹が「此の淫婦 人の棄つる所と為りて、自ら其の事を敘べ、以て其

の悔恨の意を道ふなり」と述べ、女自身が詠んだ詩と解釈していることに対する批判でもあるだろう。ただし、汪梧鳳は「総論」第三条で「戒慎始也」と述べ、『周易』帰妹・大象伝の「君子以永終知敝」を引く『詩弋』を挙げるように、物事の起点を慎んで末永く過誤がないようにすることを戒めの内容としての意義も説く。[42] 汪梧鳳はこの詩においても詩篇で描かれる女の足跡を辿っていくことで、そこに詩人が込めた意図を読み取っていこうとするのである。

以上、駆け足ではあるが、汪梧鳳の「思ひ邪無し」という解釈理念の運用方法について、戴震の解釈も視野に入れながら検討して来た。今回の考察は、汪梧鳳が例示した四首の詩の解釈を取り上げたに過ぎないが、それでも（1）汪梧鳳は詩序や朱熹のどちらかに偏った解釈はしていないこと、（2）戴震の解釈に対しても見解の相違を間々示していること、（3）戴震が詩序や歴史的資料を根拠にするのに対して、汪梧鳳は詩篇全体に対する「意領」を重視する傾向があることを導き出すことができた。少なくとも、戴震と汪梧鳳は「思ひ邪無し」という解釈理念を共有しつつも、その運用方法や方向性は必ずしも一致していないことは明らかになったのではないかと思われる。

おわりに

本稿では、これまで余り着目されることのなかった汪梧鳳の『詩学女為』を取り上げ、戴震の詩経学や不疏園内における学問との関連を視野に入れながら、その文献的性格や詩経解釈の方法について検討を行って来た。『詩学女為』における文献的性格の調査からは、不疏園という学術環境が汪梧鳳や戴震の早期の学術に果たした役割の大きさを確認することができる。また、詩経解釈の方法については更なる考察を要するが、汪梧鳳は戴震の見解を多く引きつつも、独自の解釈を示そうともしていたことが確認できた。江永の門人といわれる学者たちの解釈理念や方法は決して画一的ではないのである。ところで、本稿では考察の俎上に挙げることができなかったが、汪梧鳳が「思ひ邪無し」を詩経の解釈理念として主張した背景には、戴震からの影響だけでなく、乾隆十六年から二十年にかけて編纂された『御纂詩義折中』についても視野に入れるべきであろう。そこではまた「思ひ邪無し」という理念を用いて朱熹説に対する見直しが企図されている。[43] いわゆる清朝考証学の性格を考えるには、考証学そのもの検討や漢学・宋学という対比のみならず、明末以来の経学や学術の展開という視点も欠かせないだろう。

注

（1）汪梧鳳の没年は乾隆三十六年だが、西暦では一七七二年と換算できる。朱宏勝校点『詩学女為』（黄山書社、二〇二三年）の「整理説明」を参照。

（2）鄭虎文の「行状」には（1）鄭虎文『呑松閣集』巻三十五「汪明経松渓行状」、（2）銭儀吉『碑伝集』巻一三三「汪明経梧鳳行状」、（3）汪梧鳳『詩学女為』巻首「明経松渓先生汪君行状」、（4）汪梧鳳『松渓集』巻首（同治十二年刊本）・「明経汪君行状」といった四種類のテキストが存在する。この内、最も古い形態を保つのは『呑松閣集』版であり、『碑伝集』版はこれを翻刻したものだろう。一方、『詩学女為』版と同治刊本『松渓集』版は、不疏園を造営した人物を「其祖」から「君考」に改め、鄭牧の出身を「邑人」から「震邑人」（「震」は戴震を指す）に改め、継妻を「俞氏」から「余氏」に改め、孫を一人追加するなど、事実関係を知る汪梧鳳の子孫が訂正したと思われる部分が存在する。また、汪中の「墓誌銘」については、（1）汪中『述学別録』「大清故貢生汪君墓誌銘【并序】」、（2）汪梧鳳『松渓集』巻首（同上）「大清故貢生汪君墓誌銘【并序】」があり、後者は汪梧鳳の卒年を乾隆三十八年から三十六年に訂正している。

（3）清刊本は『四庫未収書輯刊』第十輯第二十八冊（北京出版社、二〇〇〇年）に収録される他、京都大学人文科学研究所（請求記号：東方 集―Ⅱ―一一

―一二）にも所蔵される。同治刊本は『松渓集』と題しており、神戸市立図書館（請求記号：集Ⅱ一一―八）に所蔵されている。

（4）『続修四庫全書』第六十三冊（上海古籍出版社、二〇〇二年）に収録される他、東京都立中央図書館（諸橋文庫、請求記号：九二一―MW―一五五（諸二九一））にも所蔵される。本稿では『続修四庫全書』所収本を使用し、注（1）所掲の朱宏勝校点『詩学女為』も適宜参照した。

（5）『論語』陽貨に「子謂伯魚曰、「女為周南・召南矣乎。人而不為周南・召南、其猶正牆面而立也与」とある。また、『論語』季氏には孔子が孔鯉に詩を学ぶことを勧めた逸話として、「陳亢問於伯魚曰、「子亦有異聞乎。」対曰、「未也。嘗独立、鯉趨而過庭。曰、「学詩乎。」対曰、「未也。」「不学詩、無以言。」鯉退而学詩。……」と見える。

（6）汪梧鳳『詩学女為』巻首・「序」に「予少攻詞章之学、久而厭苦之乃読経、従婺源脊斎江先生遊、与同学休寧戴震、同里汪肇龍・程瑶田輩講習弁論久之、於詩若独有所得、輒随筆存録、以便省覧、然未有成書也。洎児子【灼】既長、業詩経、時有質問、因歴挙古今伝説異同、而通会以己意、計日程課積而大備、乃命【灼】編次成集」（六〇五頁）とある。

（7）段玉裁『戴東原先生年譜』乾隆十七年壬申［一七五二］条に、「此書音義三巻、亦先生所自為、仮名汪君」（薛貞芳主編・何慶善審訂『清代徽人年譜合刊』、黄山書社、二〇〇六年、二七一頁）とある他、同治刊本『松渓集』巻末に収録する、汪梧鳳の長子・汪煇の子にあたる汪応溥の跋文にも、「応溥髫齢時、聞長老言江先生所著書、強半在不疏園中。……又言戴氏楚辞音義三巻、亦成於是時、以刻資出自汪氏、借松渓公姓名」と見える。

（8）王千仞『詩経比義述』巻首、『四庫未収書輯刊』第二輯第七冊、清乾隆嘉徳堂刻本、三頁。

（9）本書は一九七八年には大化書局より影印出版されている。本稿では大化書局本を使用する。

（10）本書は『続修四庫全書』第一七二冊にも収録される。巻末に「是書従河間紀先生処借録、経余姚邵二雲手校一過、無甚譌錯矣。乾隆己丑（乾隆三十四年［一七六九］）九月十八日益都李文藻記于京城虎坊橋北百順衚衕寓舎」という跋文がある。

（11）本書は全一冊で巻四から巻六までを遺す。その内の巻五と巻六は五巻本の巻五に相当する。

（12）戴震『経考附録』巻末・許承堯跋文に「……承堯所得是書共七巻、題曰経考附録、不著撰人姓名。然按其体例与経考同。……承堯得此書時共三冊、二巨冊為経考附録、一為先生所撰屈原賦注之首冊、皆乾隆時写本、皆湖田草堂旧蔵、皆有墨印匡格。其匡格之尺寸大小亦同。屈賦注只有不疏園刊板、微波榭未重刊、見年譜。此首冊無盧学士序、写極精工、当為不疏園初写本無疑。則此附録二冊亦出不疏園同時写本同時写本無疑矣。【盧序乃先生出遊後所得、故初写本無之。惜屈賦注只存首冊、其他無可証明也。】……且経考附録書跋題有「三」「四」二字、而「一」「二」欠、然経考附録自巻一至巻七完全無欠、則所欠一、二両冊、其必為経考又無可疑。……」（『戴東原先生全集』、五七八頁）とある。

（13）解題の冒頭で「戴震詩考四冊【精鈔稿本】此戴東原毛鄭詩考正四巻之原稿也。大題「詩経」、二字下云「戴氏経考一」、蓋当時本擬為群経考、成此一種、故存其原題」（楊洪升点校『郎園読書志』巻一、上海古籍出版社、二〇一〇年、四十一頁）というのは、中国国家図書館蔵本の体裁と一致する。

（14）汪梧鳳『詩学女為』巻七・鄭風「丰」、六五九頁。

（15）郭全芝校点・賀友齢審訂『毛詩後箋』巻七・鄭風「丰」、黄山書社、一九九九年、四一三頁。

（16）呉格点校『詩三家義集疏』巻七・鄭風「丰」、中華書局、一九八七年、三六〇頁。

（17）原文は巻末の案語（林慶彰・蔣秋華・楊晋龍・馮曉庭主編『経義考新校』巻九十八、上海古籍出版社、二〇一〇年、一八三八頁―一八四〇頁）に見える。

（18）汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第一条、六〇五―六〇七頁。

（19）陳高華・孟繁清点校『滋渓文稿』巻二十五・「読詩疑問」、中華書局、四一九頁。

（20）欒保群・田松青・呂宗力校点『全校本困学紀聞』巻三・「詩」、上海古籍出版社、二〇〇八年、三一七頁―三一八頁。

（21）林慶彰等主編『経義考新校』巻九十八、一八三七頁―一八三八頁。

（22）汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第五条、六〇九頁。

（23）欒保群校注『日知録集釈（校注本）』巻三・「楚呉諸国無詩」、浙江古籍出版社、二〇一三年、一四九頁―一五〇頁。

（24）汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第六条、六〇九頁。

（25）欒保群校注『日知録集釈（校注本）』巻三・「豳」、一五〇頁―一五一頁。

（26）汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第八条、六一〇―六一一頁。

（27）戴震『戴東原集』巻九・「与是仲明論学書」（楊応芹編『東原文集（増編）』、黄山書社、二〇〇八年）。

（28）王千仞『詩経比義述』巻首、三頁。

（29）戴震『戴氏経考』巻首・「序」、中国国家図書館蔵本。

(30) 戴震は「序」の中で「詩所以美貞而刺淫、則上之教化有時寖微、而作詩者猶欲挽救於万一、故詩足貴也、三百皆「無邪思」也」（同上）と述べる。

(31) 汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第三条、六〇八頁。

(32) 戴震『戴氏経考』巻七・鄭風「東門之墠」に「余曰詩蓋言男女之際。許嫁有礼、雖室邇不得相親、雖思為室家、必男先于女以礼迎己。託為思不越礼者之如是、以刺男女有不待礼而相奔者也」とある。

(33) 汪梧鳳『詩学女為』巻七・鄭風「東門之墠」に「東門之墠、懐賢人也。賢人不仕而隠於東門、除地圃為墠、植茜於阪、以治圃為業。有室家之楽、無廊廟之憂憂、所謂可望不可即者。故詩人深惜之。漢酒泉太守馬岌求見宋纖不得、銘曰、「丹霞百尺、青壁万尋。室邇人遠、実労我心。」古人固用此懐賢矣」（六六〇頁）とある。なお、続修四庫全書本では圃為と憂憂の二箇所を判読できないため、朱宏勝氏の校点本に拠って補った。

(34) 『御纂詩義折中』巻五・鄭風「東門之墠」に「漢酒泉太守馬岌求見宋纖而不得、銘其崖曰、「丹崖百丈、青壁万尋。室邇人遐、実労我心。」語意与此相類。然則此詩之為思賢有徴矣」（国立公文書館蔵清刊本、請求番号：経〇〇八―〇〇一〇）とある。

(35) 汪梧鳳『詩学女為』巻首・「総論」第九条に「皇上緝熙聖学、陶鋳百氏、欽定詩義折中一書、頒在学宮、星日為昭矣。【臣鳳】草莽愚昧、寝食其中者十載。茲編恭録若干篇、以凜聖人雅言之訓」（六一一頁）とある。

(36) 戴震『戴氏経考』巻七・鄭風「溱洧」に「止游女也。鄭俗以三月合于溱洧之上、以自祓除。【見十道志。】蓋国人成風如是。因而至于士女相雑、淫泆甚衆。故序其戯謔之言、投贈之事。使凡有妻子之託●是以游者、皆悪聞之而各自救止、則風俗猶可挽止也。夫未有言人之妻子与人戯謔而不愧且怒者、則詩固風諫之所為作也。毛詩序、「刺乱也」」とある。

(37) 汪梧鳳『詩学女為』巻七・鄭風「溱洧」に「朱伝、「此淫奔者自叙之辞。」今詩曰、「女曰観乎、士曰既且」、「維士与女、伊其相謔」、明是詩人作此以刺之、非士与女自叙也。戴氏震曰、「……」（六六二頁）とある。

(38) 『欽定詩経伝説彙纂』巻五・鄭風「溱洧」に「張氏彩曰、此篇曰士曰女、皆旁観而述之之詞、所謂直書其事、而醜穢自見者也」（国立公文書館蔵清刊本、請求番号：経〇三一―〇〇〇四）とある。

(39) 戴震『戴氏経考』巻三・邶風「静女」に「思賢媵也。……静女之詩、所謂賢賢易色矣。衛人擬其君之宮中無是女以備嬪媵、及女史之法廃也。故其詩非蕩佚之言也、所以譏蕩佚者之言也、蕩佚者無貞静之操。曰静女、明不淫也。蕩佚者無取乎彤管女史。曰彤管、主乎宮中之宜有法度也。春秋伝曰、「静女之三章、取彤管焉」是也。帰荑、亦以為潔白之喩。若蕩佚者曷取是。其辞微、其志荘、其称物也可以訓、其思美也不動于淫。使徒以色而已矣、豈足美哉。豈足取之乎詩。毛詩序、「刺時也。衛君無道、夫人無徳」」とある。なお、戴震の「静女」解釈を理解する上では種村前掲論文（二〇一七）を参照した。

(40) 汪梧鳳『詩学女為』巻三・邶風「静女」に「左伝引「静女之三章、取彤管焉。」」杜註、「女史記事規誨之所執」、毛鄭本此、曲解全詩、以就己説、不知左氏固断章取義也。朱伝主淫奔之説。後之議者以彤管為王宮女史之筆、静女無従得之以貽人、遂拠此以恣其論。夫管之色彤者、不必止女史之筆。欧陽氏之説固足拠矣。愚謂即作女史之筆、亦無不可。蓋細繹是詩、其為淫詞無疑。然而其男実甚、蓋男調女之詩也。首章「愛而不見」、則女固若彷彿見之而竟未之見也、詞義甚明。次章則既見矣、而曰「貽我彤管」、非真貽之也。彤管所用以書、女史者彤管、喩女之拒也。然拒者自拒、悦者自悦、而女固未之許也。未之許、故愛而敬之、而謂之「静女」。至於「帰荑」、則許之矣、故不曰「静女」而曰「美人」、則已愛而親之矣。然而初非女有成約也。何以明之。始「俟我于城隅」、終帰美於「自牧」。既地非一地、当時非一時。屢挑而惑、於是彤管之拒不終、而自牧之荑斯贈矣。詩辞具在、善読者皆可意領也。何疑乎朱子之説乎。若鄭箋「帰荑」之支離曲解、文義倶乖、而左鄭右朱者、夫亦可以不必矣」（六三九―六四〇頁）とある。

(41) 戴震『戴氏経考』巻五・衛風「氓」に「毛詩序、「刺時也。……故序其事以風焉。」陳鵬飛曰、「詩人蓋有所指而備一人之始末、以為戒也」」とある。なお、戴震の「氓」解釈を理解する上では、種村和史「同情と配慮のレトリック――戴震『毛詩補伝』に見られる厳粲詩経学の影響」（『日本宋代文学学会報』第三号、日本宋代文学学会、二〇一七年）を参照した。特に、陳鵬飛説引用の意義に関する指摘からは裨益されることが多かった。

(42) 汪梧鳳『詩学女為』巻五・衛風「氓」に「「氓之蚩蚩」、棄而後悔也。以利交者、利尽而交疎。以色交者、色衰而愛弛。華落見捐、不歯人類、痛心疾首、何地自容。聖人登此、不独為女戒也。詩弋日、「吾於「士也罔極、二三其徳」、見「君子立不易方」之訓焉。於「反是不思、亦已焉哉」、見「君子永終知敝」之戒焉。此無邪之旨也」（六四七頁）とある。

(43) 『御纂詩義折中』巻五・末尾に「孔子曰「鄭声淫」、蓋謂其楽之声調、非謂詩也。鄭詩二十一篇、女曰雞鳴・有女同車・出其東門、貞而好徳、有二南之遺風、溱洧則刺乱也。余十七篇、皆有為而作、非男女之私。何淫之有。「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」、観於鄭風益信矣」とある。

（本学文学部准教授）